

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 3月31日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：平成22年度～平成24年度

課題番号：22720175

研究課題名（和文） 漢籍訓読資料に記入された中世日本漢音の研究

研究課題名（英文） A study on Medieval Sino-Japanese *KAN-ON*

研究代表者

石山 裕慈 (ISHIYAMA Yuji)

弘前大学・教育学部・准教授

研究者番号：70552884

研究成果の概要（和文）：中世に書写された『論語』『荘子』『遊仙窟』などの漢籍を対象として、そこに記入された漢音形の実態について研究を行った。従来、漢籍に記入された漢音形は日本漢文のそれに比べて規範的であると指摘されてきたが、本研究の結果、漢籍内部でも温度差が存することが確認できた。すなわち、『論語』と『荘子』とが同等の性質を有する一方で、伝奇小説である『遊仙窟』はこの両者に比べ非規範的な漢音形が多く出現するなど、「漢籍」全体が均質的というわけではない状況が窺えた。

研究成果の概要（英文）：This study shows that the texts of Chinese classics have each styles of Medieval Sino-Japanese. For example, Sino-Japanese in "*Youxianku*" is more Japanized than in "*Lunyu*" and in "*Zhuangzi*". Former studies suggest that the levels of Japanization of Sino-Japanese differ between Chinese classics and Chinese texts written by Japanese authors. In this study, it is shown that there are different levels of Japanization even among Chinese classics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成22年度	500,000	150,000	650,000
平成23年度	400,000	120,000	520,000
平成24年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本漢字音・日本語史・漢音

1. 研究開始当初の背景

報告者（石山）は日本漢字音史に関心を抱いている者であり、平成 20 年度には「中世日本漢字音における声調の研究」と題した博士論文を提出、学位を取得した。

この博士論文の中では、『論語』を題材として漢音声調についても言及し、日本漢文である『本朝文粹』などに比べて規範性が高いこと、またその背景として中国側の注釈書が介在していることなどを指摘した。漢籍と日本漢文との間で漢字音の規範性に差が存することはすでに先行研究で指摘されており、その点では常識的で妥当な結果とすることができる。

とはいえ、この博士論文では漢音声調のほか呉音声調も扱い、「漢語声調」にも言及したほか、漢音に関しても『論語』『本朝文粹』『文鏡秘府論』と、受容者も時代も様々な資料を考察対象とした。その結果、日本漢字音における声調というものに対してある程度の見通しを得ることはできた反面、総花的で個々の事柄の吟味が不徹底に終わったという反省点もあった。また、この博士論文では「声調」に重点を置いたことから、仮名音注や反切注なども含めた字音注全般の体系的考察という課題も残されていた。

個別的な事柄として、例えば『論語』に関しては、書写者の素性や系統、時代などを異にする数多くの古写本が残されているのであり、各本の間で違いは見られるのか、どのような要素がどのように漢字音に影響を与えているかは未解明のままだった。また、『論語』とそれ以外の漢籍との間に日本漢字音の違いがあるか否かについても考察していなかった。このように、様々な課題を積み残していた面がある。

その頃、佐々木勇氏の名著『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』（汲古書院、2009）が出版され、日本漢字音史研究、とりわけ漢音研究は新たな段階に入っていた。ここでは漢籍訓点資料である『群書治要』について、仮名音注・声調の双方について詳細な検討が行われているほか、史書である『史記』についても言及されており、報告者も大いに刺激・影響を受けた。

その一方で、書誌的な研究として高橋智氏による『室町時代古鈔本『論語集解』の研究』（汲古書院、2008）もこの頃に上梓された。このように、『論語』をはじめとする漢籍訓読資料を主な題材として、日本漢字音史研究が進展する素地が十分にできあがっていたのが研究開始当時の状況であった。一連の先行研究に導かれ、対象を漢籍訓読資料に絞り込み、そこに記入された日本漢音のあり方を調査するという構想を抱き、本研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究は、日本漢字音史研究に関わる分野のうち、特に漢籍訓読資料に記入された漢音形の考察を試みたものである。日本漢音の音形・声調を記述するとともに、そのような加点が行われるに至った背景を解明することを主眼としている。本研究の進捗により、漢籍訓読資料以外の資料に加えられた漢音形の考察や日本呉音研究などへの波及が期待される場所であった。また、加点の根拠を探ることにより、加点者を取り巻く学問的な環境や当該典籍の学習のされ方など、様々な事柄を明らかにしうる効果も想定される。

日本漢音は唐代長安方言を母胎としていることから、呉音に比べると中古音とよく対応しているという事情がある。それだけに、日本漢音の規範性が過信されがちであり、文献資料に韻書の体系から外れる字音点が出現した場合には「呉音形の混入」などとして片付けられがちであった。しかしこのような処理には危険性が内包されているのであって、呉音を知るためには漢音の性質を解明することが不可欠なのである。

加えて、漢籍訓読資料の字音点全般の性質が均質的かという問題も存する上に、日本漢文や字音直読資料に加えられた日本漢音の性質を究明しようとする場合にも、やはり前提条件として漢籍訓読資料における日本漢音の実態は押さえておく必要がある。

先述したように、日本漢音を取り巻く研究環境は、近年大きく発展しつつある。本研究はそれらの驥尾に付して、いささかなりとも日本漢音研究全体の水準向上に寄与しようともくろむものである。

3. 研究の方法

資料の種類によって日本漢音の規範性に差が存するということは従来指摘されてきたところであるが、先行研究では様々な漢籍訓読資料について、どのような要素がどのように働いているか、については、十分に解明されているとは言いがたかった。すなわち、漢籍である『群書治要』や『論語』に比べて、日本漢文の『本朝文粹』などが、様々な面において非規範的な面を見せているという事実自体は動かないとしても、それが漢籍・日本漢文という原作者の違いによっているのか、経書と漢詩文集という文体差の問題なのか、あるいは清原家／中原家といった加点者の系統に起因するのか、といった詳細については、未解明な面が多く残されていた。また、同一の作品に記入された字音点均質的であるかについても、解明しておく必要があった。

そこで、本研究では、いかなる要素がどの

ように日本漢字音に影響を与えているのかを考察することを目標とし、いくつかの条件を固定した上で、相異なる要素を比較するという方法を採用した。具体的には、中世に書写された数種類の『論語』古写本を調査し、『論語』各本間で何らかの質的な相違がないか考察した。その上で、漢籍であり、『經典積文』での注釈は行われているものの大学寮での講読の対象とならなかった『莊子』の字音点を調査し、『論語』との比較・対照を試みた。

この他、「漢籍」ではあるものの、伝奇小説であり経書とは明らかに傾向を異にする『遊仙窟』についても考察を行った。このように、本研究は、いわば補助線を引く試みを積極的に行ったという特徴がある。

本研究の調査対象は中世に記入された訓点資料であり、調査を遂行するに当たっては、できる限り実地調査を行い、原本やカラー写真を閲覧した。また、本補助金を用いて複写物を調達するとともに、影印・複製として刊行されているものやウェブ上にカラー写真が公開されているものについては、これらを積極的に利用した。

このほか、本補助金を使って研究書・参考書を多数購入したほか、勤務先の図書館に蔵されていない雑誌の論文コピーも取り寄せるなどし、最新の研究成果を消化できるよう努めた。

4. 研究成果

前項で述べた如く、まず中世に書写された複数種の『論語』古写本に記入された字音声点について調査した。その結果、それぞれが書写年代に応じた日本語化を蒙っているものの、各本の間で質的な差は見られず、報告者が2008年に報告した（『論語古写本における漢字音について』（『日本語学論集』4）参照）仮名音注の実態と並行していることが読み取れた（後述雑誌論文（5））。これは清原家・中原家といった系統の違いが本質的な違いに結びついていないということであり、その背後には『經典積文』による注釈があると考えられた。

『論語』に記入された日本漢音の性質がある程度明らかになったところで、『莊子』古写本の字音点の考察に着手した。先述のように、『論語』『莊子』には共通点と相違点が認められるのであり、漢字音に違いがあるか否か、注目される場所であった。調査の結果、『莊子』では『論語』と仮名音注・字音声点・反切注などの割合が極端に異なっている資料が見られるほか、『論語』ではあまり存しない人為的漢音（反切注などから人為的に導き出された音形）が散見されるなど、『論語』とはいささか傾向を異にする側面が観察された。しかし、漢字音の規範性や字音声点の

性質などはおしなべて『論語』と大同であり、『論語』と同じく『經典積文』を踏まえたと思われる加点が多く見出せた。大学寮での講読の有無という違いこそあれ、『論語』と『莊子』とは日本漢字音に関しては似通った性質を有する資料であると考えられる（雑誌論文（4））。

それでは、おおよそ漢籍に属するものは均質的な性質を有しているかとなると、そのようなことはない。すなわち、伝奇小説である『遊仙窟』の漢字音というのは、『論語』や『莊子』とはずいぶんと趣を異にしているのである（雑誌論文（1））。『遊仙窟』においては、呉音形や類推によって生み出されたと思しき仮名音注が散見されるほか、字音声点についても日本漢音の枠組みから外れた割合が高いなど、総じて『論語』『莊子』に比べ規範性が低くなっているのであり、文体差が日本漢字音に多分に影響を与えていることが見て取れた。

『論語』各本に関しては、従来研究が手薄だった室町時代頃の古写本についても調査した。その結果、『論語』各本における清濁とはしばしば韻書と対応しない場合があるほか、同じ漢字・漢語の清濁が、資料によって（時には同じ資料の中でも）一定していない例も散見された。字音の清濁とは流動的であり、韻学的知識などによって絶えず補正される性質を有していたと考えられる（雑誌論文（3）、学会発表（2））。

本研究では、この他に字音仮名遣いの実態についても調査を行った（雑誌論文（2）、学会発表（1））。現行の漢和辞典類でどのような音形が呉音・漢音・唐音・慣用音として掲載されているかを調査したものであり、日本漢字音史研究が進展した今日にあってもなお、辞書によって様々な字音系が出現している実態が看取された。先述した、『論語』の中でも清濁が一定しないという事柄と通底していると思われるところである。

本研究の結果、漢籍訓読資料における日本漢音について様々な事柄が明らかになったが、他にもいろいろな条件を固定し、様々な角度から考察する余地は残されているのであり、例えば漢詩文集ではどうか、歴史書ではどうか、など様々な論点がありうる。また、日本漢音の全貌に肉薄するためには漢籍以外にも目を向け、漢音読の仏典の実態などを考察する必要があるのであり、今後の研究活動に当たっての様々な課題が浮き彫りになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

(1) 石山裕慈「『遊仙窟』各本に記入された日本漢字音の位置づけ」(『国語と国文学』第90巻第7号掲載予定・掲載ページ未定、2013年、査読無)

(2) 石山裕慈「字音仮名遣い」の現状と提言(『弘前大学国語国文学』第34号・pp. 15-30、2013年)

(3) 石山裕慈「室町時代における漢字音の清濁——『論語』古写本を題材として——」(『弘前大学教育学部紀要』第108号・pp. 9-17、2012年、査読無)

(4) 石山裕慈「高山寺本『莊子』の漢字音」(『弘前大学教育学部紀要』第107号・pp. 7-14、2012年、査読無)

(5) 石山裕慈「中世における『論語』古写本の声点について」(『弘前大学教育学部紀要』第105号・pp. 1-8、2011年、査読無)

[学会発表] (計2件)

(1) 石山裕慈「「字音仮名遣い」の現状について」(2012年度弘前大学国語国文学会(弘前大学)、2012年11月18日)

(2) 石山裕慈「室町時代における漢字音の清濁——『論語』古写本を題材として——」(第105回訓点語学会研究発表会(東京大学)、2011年10月16日)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石山 裕慈 (ISHIYAMA Yuji)

弘前大学・教育学部・准教授

研究者番号：70552884